

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2690400060		
法人名	メディカルケア御所ノ内株式会社		
事業所名	グループホーム 御所ノ内ホーム (3階)		
所在地	京都市下京区西七条南月読町102-1		
自己評価作成日	平成27年12月7日	評価結果市町村受理日	平成28年3月11日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	true&JijyoCode=2690400060-00&PrefCd=26&VersionCd=022">http://www.kajikensaku.jp/26/index.php?action=kouhyou_detail_2015_022_kan>true&JijyoCode=2690400060-00&PrefCd=26&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会
所在地	〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83-1「ひと・まち交流館 京都」1F
訪問調査日	平成28年1月13日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

京都武田病院グループとして、医療との連携に力を入れ、健康で楽しく過ごせる時間を提供出来るよう努めます。また、①家庭的で温かなケアを提供します。②ひとりひとりに寄り添うケアを心懸けます。③確かな知識・技術・方法でケアを行います。の3つの職員理念でサービス利用者を支えます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

御所ノ内ホーム(以下ホーム)の利用者は近隣の方が多く、家族・友人の面会が多いのが強みになっている。毎日訪ねてくる家族は複数おられ、出勤の前後に来られる方・時折の方にも、職員は声をかけている。利用者の状況について意見交換を行い、これらの情報はアットホームな環境づくりや一人ひとりに寄り添うケアの実践に繋げている。開設3年目に入り、職員も定着しつつある。昨年は「福祉人材育成認証」を得ている。又、職員は先輩の支援を受け介護福祉士受験で7名の合格者が誕生した。職員から「利用者と係わる時間が長く、密な係りはやりがいを感じる」「編み物・縫物など利用者に出ることを見つけ取り組みたい」との話が聞けた。ホーム一階で毎週開催される「認知症カフェ(ひだまりカフェ)」や「英語教室」には地域の方も少数ではあるが参加があり、大変気に入り毎回参加の利用者もいる。利用者・家族・職員が一体となり活気あるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員から職員理念を作って欲しいとの依頼があり、①家庭的で温かなケアを提供します。②ひとりひとりに寄り添うケアを心懸けます。③確かな知識・技術・方法でケアを行います。の3つの理念を共有し実践している。	開設3年目、職員も定着しつつあり、職員により設けられた職員理念に基づき実践を重ねている。京都府福祉人材認証制度の取得を職員も交え取組み昨年承認を得た。今までの運営・実践の確認と今後の方向を明確にする貴重な学びや経験を得ている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	運営推進会議に町内役員の参加があり、認知症カフェや焼き芋行事などで地域との交流を行うようにしている。	毎週金曜日に開催するひだまりカフェに英語教室も加わり、地域の方の参加もある。移動販売の焼き芋屋さんに、事業所の駐車場を提供しており近所の方も買いに来られる。日常的に利用者と地域住民の交流の場になっている。土地柄子供は少なく、保育園・小学校等は距離的に遠く交流はない。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症講座などを職員主導で行いたい思いはあるが実現していない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	具体的な取組について協議し、実際に改善出来ている。	メンバーは家族会会長、町内会役員、地域包括支援センターである。事業所に寄せられた事業所の課題に、活発な意見交換がなされている。出された課題は改善されている。また、第三者委員の候補者の推薦など、前向きな意見を貰いサービスに活かしている。メンバーの中に連続しての欠席がおられる。	メンバーの欠席もあり、地域の情報収集や多角的な意見交換の見地からメンバーの増員・強化を期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	下京西部地域包括支援センター、事業者連絡会議などで連絡を密にしている。	地域の関係機関との会合には努めて参加し、区・市の担当部署とは日頃から情報交換等を行い、相談もかけやすい関係が築けている	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	内部研修においても高齢者の権利擁護と拘束0については実施している。	入所契約書に明記、業務マニュアルが作成され、各ユニットに設置している。研修「接遇人権研修(スピーチロックを含め考える)」は職員全員が受講した。日々のケアは利用者の気持ちを遮らないように心掛けている。交通事故防止のため玄関は施錠しているが、利用者が出かけた時には出かけられるようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修で取組、入浴時に全身観察を行うなど、予防や早期発見に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	家族・身元引受人を含めて説明している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族・身元引受人によっては1時間程度掛けて納得・理解をされるまで説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱の設置、利用を勧めているが御利用はない。家族様と職員で良くコミュニケーションを取るようになっているので、	利用前の住まいが近い人も多く、毎日面会に来られる人も複数いる。自転車でも早朝または夜に、訪ねて来られる家族もいる。来所時の職員との会話も多く、家族から愚痴を聞いたり、利用者情報を得ている。運営推進会議に家族会会長も参加し、サービスの内容や、家族の要望にも関心を寄せられている。家族の希望で松尾大社の初詣を行った。	利用者や家族の意向に寄り添い、今後の運営への参考にするために、利用者(家族)アンケート調査や家族会の定期的開催を実施し、サービスの向上に活かされることを提案する。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月ユニット会議、リーダー会議を行い意見のボトムアップに努めている。	各種の会議の内容は、日常のゴミ処理・掃除・研修要望と日常の生活議題が検討され改善がなされている。個別面談は1回が終わり後1回行う予定である。昨年は7名の介護福祉士の資格取得者が出るなど職員も前向きな姿勢で職務に臨んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	京都府福祉人材認証制度への認証に取組み認証を取得するなど、積極的に取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内外の研修受講機会を設け、現場OJTも担当者を決めて取り組んでいる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着サービス協議会に参加し、研修会などに参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ケアマネジャー・ユニット主任・担当者が本人様の要望を聞きだすようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	見学の段階から本人様・家族様の不安な点、疑問点に答えるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	居宅介護支援事業所・病院相談室などとも連携し、必要な支援を見極めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護する側、される側という関係を作らずに、「擬似家族」とでもいうような温かい関係構築を目指している。洗濯物たたみやテーブルを拭くなど役割を持って貰っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ケアプランの説明や見直しについても現場職員が面会時に家族の意向を確認したり、普段の様子を伝えたりして、「家族の意向を踏まえたケア」を作り上げようとしており、情報共有にも努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会者が面会に来易い雰囲気作りをしている。ゆっくり過ごして頂けるようにしている。	近所の友人で毎日面会に来られている方がいる。家族から聞きとったなじみの(行きつけのスーパー・散歩コース・公園)情報を参考に日中の生活や外出の支援に活かしている。元電車の運転手は梅小路に行く姿勢が良くなり「元気が増した」と言われる。勤めていた会社訪問や自宅に帰る利用者もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	席の配置や一緒に取り組めるレクレーションの実施、共に行う家事などをして、利用者間の調整にも入り工夫している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	社内の居宅介護支援事業所や病院相談室などと連携して関係性を維持している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	スタッフはサービス利用者1人1人とコミュニケーションを取り、思いや希望を聞くようにしている。	見学時から本人の思いを収集し、記録に残している。書式はセンター方式を使用し、利用者・家族の思いやこれまでの暮らし方、経験や趣味を聞き(囲碁を続けたい・スカーフが好き・毛染めをしたい等々)入居後の生活に繋げている。担当介護士を中心に随時情報収集を行い、ユニット会議で職員間での情報共有を図っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	担当者を決め、家族から情報を聞いたりして把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	書式を整備し、ユニット会議などで検討もを行い、過ごし方についてもケアプランなどに反映出きる様にしている。一覧性のある書式で情報を共有し、変化にも気づけるようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当者が課題を抽出しユニット会議に挙げて検討し、ケアプランに反映させている。	収集した情報をもとに課題を抽出し計画を立案している。職員は2~3名の利用者を受け持ち、ケアプラン見直し時(3か月毎)又は必要時に見直しをしている。利用者(家族)の意見と共に日常生活の推移を「居室報告書」にまとめ、ユニット会議でケースカンファレンスを行っている。具体策の記載が乏しい感がある。	具体策は、ケースカンファレンスで話し合った内容を具体的に書き、個別性のある計画の立案を行い、職員間で共有し実践されることを期待する。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録に本人の様子や特記事項を、水分排せつ食事量バイタルなどは一覧性のあるもので情報共有し、見直しに活かしている。担当者からの報告を挙げる書式もある。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族様の負担を減らす取組をしている(オムツの発注代行など)。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	馴染みの店や場所などを活用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診希望の通り介助している(多いくらい)	かかりつけ医は、隣接する京都武田病院を希望する利用者が多いが、これまでのかかりつけ医を利用する方もいる。月2回の内科医往診と共に、希望者は訪問歯科診療(歯科衛生士同行)週1回を利用している。看護師は常勤で勤務し、医師共に夜間も連絡の取れる体制である。物忘れ外来や必要な受診には職員が同行で状況報告を行い、職員間の病状の共有に繋げている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師はホームに4人おり、十分な連携が取れている。毎日のバイタルチェックを行い、申し送りなど情報共有も行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	京都武田病院と同グループであり、普段から連携を取りながらサービスを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	京都武田病院の医師が訪問診療を行っており、看取りの判断があれば家族様への説明など機会を作れる。また、看取りに関する方針など入所時にも説明を行うようにしている。	入居時より「重度化した場合の対応に係る指針」に沿って、利用者・家族と話し合い、「看取り介護についての同意書」をもらっている。職員は外部研修やユニットでの勉強会を行い、支援に取り組んでいる。最後を一人で迎えることがないよう、家族が宿泊できる体制を取り、家族とともに看取りを行っている。現在ターミナル期の利用者が1名おられる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	内部研修において、看護スタッフも交え救急対応の研修を行っている。また、ユニット毎に緊急時の対応について協議している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防避難訓練を年2回行う際に避難の手順を確認している。地域との防災協定について打診を行っているが防災協定は締結出来ていない。町内防災用品は倉庫を提供し預かっている。	消防署立ち合いのもと、昼・夜を想定した火災訓練を年2回行っている。建物の北と南側に避難階段があり、利用者と一緒に避難の実施訓練をしている。母体の京都武田病院が近隣の町内会と防災協定をしており、町内防災用品を倉庫に預かっている。地域の方の参加は得ていないが、災害時は病院職員の応援がある。備蓄(水・食料)3日分は、地域の方の分も含め病院でしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員理念にも「一人一人に寄り添う介護を行います」とあるように、高齢者の人格やプライバシーに充分配慮している。特に排せつ・入浴介助の際には羞恥心に配慮している。	採用時と毎年の内部研修で「接遇人権研修(スピーチロックを含め考える)」を行っている。中核症状事例をもとに、近づき方・距離のとり方・態度・言葉等細かな指導がある。OJTにおいては、1か月間のプリセプター制度を取り入れている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	センター方式を採用し、利用者の言葉や趣向に注目したケアを行えるよう配慮している。また、本人に確認し選択できるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者1人1人のペースに合わせ本人の希望に沿うケアを行うようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	スカーフを巻いたり、毛染めなどの希望も聞いて支援できるようにしている。一人一人の好みを聞いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	お盆拭きなどの準備や片付けを一緒に行っている。また、エプロンのセッティングなども出来る方には協力して頂いている。職員と入居者は同じテーブルで同じものを食べている。	昼食・夕食は1階の厨房で料理している。朝食とおやつは利用者の希望を聞き、献立から買い物、調理から片付けまで利用者と一緒に行い、食事は職員も同席している。食材は地元産を使用している。近所の魚屋さんからはその日仕入れた鮮魚が届き、毎年ブリの解体ショーの実演がある。おやつは皆で作るたこ焼き・もんじゃ焼が好評である。石焼き羊屋さんの金時羊や季節料理・行事食も楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	1人1人の状態を把握できるように書式を整え、申し送りなどでも情報を共有し、提供の方法についても工夫している。食事形態についても個々の状態に応じたものを提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	肺炎防止の為、毎食後口腔ケアに力を入れている。また、気になることがあれば訪問歯科診療と相談し異常の早期発見・予防に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排せつチェックシートでリズムを把握し、看護師と緩下剤などの調整も相談して、排泄の自律を目指している。	排泄記録で利用者個々の排泄パターンを把握している。声掛けや誘導で自立にむけて努力をしている。夜間頻尿にもその都度対応している。夜間ポータブルトイレ使用の方も、昼間はトイレ排泄を支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事については社内の他施設メニューを参考に(管理栄養士が組んだメニュー)、厨房とも協力して工夫している。また、ヨーグルト摂取や腹部マッサージも実施している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	出来るだけ本人の希望に沿うようにしている。夜間などは職員数が限られる為、安全の面から断っている。	浴室内に移動補助の手すりが設置してある。個浴の湯はそのつど交換している。同性介助で必要に合わせ2人介助を行っている。入浴時間は昼間のみとしている。回数は週2～4回の入浴をしている。好みの入浴剤・シャンプーを使用される方もいる。事業所内にはリフト浴があるが、出来るだけ個浴での支援を職員は目指している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	消灯時間や照明強さ、室温などにも配慮して支援している。また日中の活動を促し、生活リズムを整え安眠できるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の変更については看護師から介護職に申し送りするようにし、注意点や観察のポイントについても気をつけている。ファイルに薬の説明書を綴じ、服薬時に複数回のチェックをするなどしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	1日1回は時間をつくり体操や外出など支援しているが、入居者が持て余している時間もあり、今後の課題である。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出の機会を増やしているが近隣が中心であり、車を使つての外出は紅葉狩り等イベントに限られている。	毎日の食材の買い物には利用者とともにやっている。天気の良い日は、事業所周りを散歩し気分転換を行っている。ドライブでは、嵐山・高雄・広沢の池・宝ヶ池等々に行き季節の風情や花々を楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物と一緒に行く、訪ねてきたパン屋さんでパンを選ぶなど「お小遣い」を預かり、使う機会を作っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	手紙の代読などを行っている。また、家族への電話等、本人の希望に応じて実施している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ソファや和室の活用などを行い、また季節の飾り付けを入居者と一緒に作るなどして居心地の良い空間を一緒に作り上げている。	リビングに入ると壁に折り紙の作品(木々が雪化粧した美しい風景の大作)が掲げられている。利用者と共に四季に応じた作品を作り、季節を感じている。日めくりの大型カレンダーも手作りである。リビング内では、手引き歩行かシルバーカーで歩行し歩く力の維持に努めている。ゆったりと余裕のある空間があり、利用者は日中のほとんどを、自分のペースで自分らしくリビング内で過ごしている。清掃は職員が毎日行い清潔感がある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テーブル配置やソファの座る位置など、利用者1人1人が居心地の良い場所を確保出来るように支援している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に家族や本人に使い慣れた物品の受入について説明し、出来るだけ馴染みの物に囲まれた生活を推奨している。	居室が向かい合う廊下の壁には、イベントや行事での利用者の写真や習字作品が飾られている。居室内も自宅で慣れ親しんだ、整理ダンス・安楽椅子・縫いぐるみ等の小物が置かれている。元気なころの日本舞踊の写真がひときわ目を引いた。毎日の清掃により整頓が行き届いている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活を送れるように工夫している	リビングから見守りしやすいレイアウトとし、木製の表示板なども使用して、入居者にわかりやすくし、洗面台なども照明・使い勝手を工夫して、認知症があっても出来るだけ自律した生活を送れるよう工夫している。判りやすく飾りつけしている。		